

『百人一首』 中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力 (三)

山川に風のかけたるしがらみは 流れもあへぬ紅葉なりけり

春道 列樹

〈歌意〉

「山の中を流れる谷川に、風が作っているせきは、いっばいに散り込んで流れることもできずにたまっている紅葉だったのだなあ。」

この歌は『古今集』(秋・三〇三番)に出ています。○しがらみ 柵。

(春道列樹)
生年未詳、延熹二十(九二〇)年。

〈よみ〉

山川

可せの

閑希多類し可らみハ

な可れ毛あへぬ 毛み遅

奈利介り

墨量、行の長さ、行間、連綿の長さが特徴的です。

(青藍)

中村素堂先生の書

書間欽堂先生提供